

東日本大震災第2次派遣調査チームに参加して

株式会社町田アンド町田商会
専務取締役 村上康代

東日本大震災発生後、当社では3月19日～25日まで第1次災害支援チームを派遣した。その報告から、地震と津波による被害は甚大で、被災地に対する支援が長期に渡ると思われた。そこで、第2次災害支援チームを派遣するにあたり、必要な支援とは何かを探るため山田町とその周辺の被災地域に向かった。調査期間は4月13日～14日である。

4月13日

東和町を出発して避難所のひとつである山田南小学校を目指した。途中、釜石市を通過した。テレビの映像で毎日見ていた被災地の様子だが、実際に見る被災地の現状はすさまじく言葉にならなかった。また、同じ釜石市でも津波の被害がなかった地域では営業を再開している店も多く、何事もなかったように見える。釜石市から山田町まで延々続く沿岸部はみな同じように建物が破壊され、津波のパワー、自然の猛威を思い知らされた。少なくとも訪れた時の波は静かで海はきれいに見えた。震災前の三陸海岸は本当に景色のすばらしい観光地だった違いない。すでに土は乾ききり、第1次災害支援チームから聞いていたヘドロや潮、油等の混ざり合ったにおいを感じる事はできなかった。当日は風が強くガレキ地帯では粉塵が舞い上がり、保護メガネとマスクが必需品だった。

<山田南小学校>

7時50分到着。朝食のためのおにぎりが昇降口の物資配給場所に少し残っていた。「固形の炭水化物が続いて食欲が落ちている。野菜が不足しており温かい汁物が喜ばれている」という報道を思い出した。

山田南小学校を拠点に救援活動を行っている昭和大学医療チームの話聞いた。昭和大学は震災の翌週から被災地に入り、救護所内の活動に留まらず、山田町と町民のために安心できる質の高い医療を受けられるようにするためには何が必要なかを常に考えながら行動をしているとの事だった。非常に学ぶ点が多かった。山田町では地元の医師が地域医療の再生に積極的に関わり立ち上がりつつある事。そして4月15日には活動を終了する事を知った。

小学校のインフラは電気、水道が使えるようになっていて、第1次の時には仮設トイレやポータブルトイレを使用していたが、今回は水洗トイレを使用していた。下着や衣

類・紙おむつ・マスク・ティッシュペーパー・洗剤等の支援物資がいろいろダンボールに入って積まれていた。

<船越地区>

10時30分到着。1次で支援物資を届けたところである。個人宅を避難所として使っており、前回訪問時は35名だった避難民が現在は26名。インフラは電気、上水道は使えるようになったが、下水道がまだなのでトイレは仮設を使用。洗濯は沢の水を利用。お風呂はガソリンが手に入るようになったので近くの温泉を利用しており、衛生面ではかなり改善していた。毎日、自衛隊の医療班が訪問してくれ、血圧の薬などももらえるようになったので特に不安はないとの事だった。食料を始め必要な物資は自衛隊が運んでくれている。今回、持って行った物資の中から消石灰を希望され提供した。明らかにニーズは変わってきていた。

<山田町海洋センター>

11時25分到着。町のボランティアセンターが立ち上がったと聞き訪ねた。ここは避難所ではないので避難民はいなかったが、体育館の中には支援物資が置いてあった。水・タオル・古着・ラップやアルミホイル・ティッシュ・マスク・速乾性アルコール消毒剤・米・カップ麺・お菓子(せんべい・クッキー・チョコなど)など様々あった。これらは関東や関西から送られてきた物のようだった。

ボランティアの募集が貼り出されていた。ボランティアの種類はガレキの撤去・個人宅の片付けや泥だしの手伝い・炊き出しの手伝い・避難所で行われるイベントの手伝い等であった。

<織笠コミュニティセンター>

11時53分到着。前回第1次災害支援チームが支援物資を提供した所である。3月11日現在の避難民は160名だったが、4月13日現在で114名。寝たきりの人が1名いて現在受入施設を探している。秋田県と岩手県から行政の応援が3名来ているとの事。インフラは上水道が開通し、トイレは浄化槽なので施設内の水洗トイレを使用している。電気が通り、風呂も1日交代で男湯・女湯として入れるようになった。今は必要な物資があれば紙に書いて町に依頼すれば翌日には手に入る。色々な物が揃ってくると人の要求はだんだんエスカレートし、最近では「冷蔵庫が欲しい、洗濯機が欲しい」という声も聞こえてくるようになった。避難所代表の話で印象深かったのは「前回、皆さんが訪れた時に歯ブラシを提供してもらい、1週間ぶりに歯磨きができた。本当に有り難かった。救援物資が行政の窓口に届いてはいても実際に避難民の手元に届くまでは非常に時間がかかった。」

これにより、「災害時には、いかに早く必要な場所に必要な物資を直接届けることが

大事なのだ」という事が確認できた。

織笠コミュニティセンターの入り口で菊の花を見つけた。前日、現地サポーターの武政夫妻が話していた。「亡くなった方に手向けるお花がない事に気がついた。鹿児島の知人に菊の花を1万本送ってもらい5カ所の遺体安置所に届けた」こういう形の支援もあるのかと感激した。

<山田町役場>

13時35分到着。札幌ラーメン(1,000食)の炊き出しが行われ、沢山の人がおいしそうに食べていた。隣の広場では、同じ青森県中泊町のボランティアがバナナ・りんごの配布、衣類・長靴の配布を行っていた。本当に日本のあちこちから、様々な形の支援が行われている事を実感した。

<道の駅 やまだ>

14時07分到着。第1次災害支援チームが訪れた時には、米・紙おむつ・手指消毒剤・マスク・歯ブラシ等の支援物資を提供。ところが、今回訪ねてみると驚いた。普通の道の駅に戻っていた。他県や近隣で採れた野菜や果物、漬け物や干物などの加工品、パンや牛乳など商品も豊富で沢山の買い物客がいた。「本当にここは被災地なのだろうか」と目を疑った。前回対応してくれた職員の方が休みで話が聞けず残念だった。

<浪板地区交流促進センター>

14時30分到着。前回訪問時はお米、カセットコンロ用ガスボンベ・目薬・うがい薬等の支援物資を提供。毎日15時に町からの支援物資が運ばれている。また、その時に町からの伝達事項の発表があるため近隣の住民も集まってくる。第1次災害支援チームが訪れた時と明らかに違うのは、以前は徒歩で来ていた近隣住民が現在は自家用車で来ているという事だった。ガソリンの供給が潤沢になった証拠だった。ここでも、不足している物資はないか訪ねたが、町からの供給物資で十分足りており、特に希望する物はないとの事。ボランティアによる炊き出しや大学生ボランティアによるレクリエーションが子供たちに喜ばれているようだった。

4月14日

宿泊していた釜石市の旅館を出発して再び山田町に向かった。支援物資の確認と私たちが支援できる事は何かを探りたかった。山田町はガレキの集積所となっている場所があり、鉄くず・木片・車などに分別されていた。ガレキを運ぶトラックは自衛隊の物よりも地元や県外の民間の物が多く見受けられ、青森県からのトラックも多く目に付いた。少し強い風が吹くと粉塵が舞い上がり、被災住民の健康に影響がなけれ

ば良いがと思った。

<山田町役場>

8時10分到着。物資集積所の中に入れてもらった。中では自衛隊や町の職員が忙しく働いていた。新品の洗濯機が30台ほどもあった。仮設住宅用だろうか。その他、米・野菜・カップ麺・マスクや手指消毒剤などの衛生用品・水・衣料品・家庭常備薬（OTC 医薬品）など本当に色々な種類の物が沢山あった。すでに衣料品の受付は打ち切ったようだ。

地元診療所の近藤医院が4月11日から旧山田病院の施設で診療を再開したことを確認した。また、町民の足としてシャトルバスの運行が始まっていた。各避難所と町役場・山田南小学校・山田高校を30分毎に巡回していた。

町民に配っていた資料の中に保健師チームや心のケアチームの情報もあった。保健師は8チーム（岩手県・さいたま市・和歌山県・青森県・大阪府など）、心のケアチームは2つ（大阪府と旭川圭泉会病院）活動していた。今回は訪れなかった大浦地区に行ってみる事にした。

<大浦漁村センター>

9時到着。ここも支援物資は行き渡っていたが、体温計と目薬、下剤の希望があったので提供した。近隣住民の家々も少し訪問してみる事にした。4件尋ねたが、皆、物資の供給が毎日あるし、必要なものは車で買い物に行けるので不自由さはなくなったと話してくれた。電気も使えるようになり、下水はまだだが、水やガスも使えるようになったので徐々に改善されているとの事。

<山田中学校>

11時05分到着。仮設住宅の建設が行われていた。数えてみたら144棟あった。そろそろ学校も新学期が始まるので急ピッチで進められている模様。それでも、すべての被災者の数に対して足りないのではないかと思われた。支援物資等は足りてきているとはいうものの、プライバシーのない避難所暮らしから開放されるまではまだまだ時間がかかりそうである。

この後、我々は山田南小学校に戻り、昭和大学の医療チームに別れの挨拶をして弘前への帰途についた。

調査の結果、山田町とその周辺地域ではインフラの整備が進むにつれて被災者の生活環境や物資の配給状況が被災直後とは比べ物にならないくらい改善されていた。今後、早急に物資を提供する必要がないことが確認できた。また、医療についても、

地元の意欲ある医師達により保険医療機関が立ち上がり、復旧に向けて動きだしていた。4月15日で山田南小学校の救護所はなくなるが、自衛隊の援助がなくなる頃に再度調査する必要があるかもしれない。

避難所で生活する人たちは避難所暮らしが長くなり、本当はいろいろ辛い事もあると思うが、総じて皆明るく、「ガンバロウ！」という気力に満ち溢れていたように思う。差し入れたりんごや日本酒をととても喜んでくれ、生活必需品ではなく生活を楽しむ物が好まれるようになってきたのだろう。辛抱強い県民性もあり必ずや復興できると確信した。私たちは弘前に戻って来たが、これからも山田町とその周辺の情報収集に努め、必要なときには必要な援助を続けて行きたいと思っている。